A-Lab Artist Talk

# 「うまれくる言葉」を交わして

出　演　野口卓海さん (美術批評家･詩人)、小出麻代さん(出品作家)
司　会　都市魅力創造発信課長　松長
日　時　平成29年3月11日(土)／午後3時～午後4時
場　所　あまらぶアートラボ(A-Lab ロビー)

## そこで起こる化学変化を

**小出麻代さん（以下　小出）**　まず、今回の対談に野口さんに来ていただこうと思ったいくつかのきっかけからお話します。あまらぶアートラボで展覧会をすることが決まって最初にリサーチに行ったのが、尼崎市立地域研究史料館でした。館長さんに尼崎の話を色々と聞かせていただいた中で、地名の話になりました。地名って、そこがかつてこういう姿をしてたんだみたいなものが変わらず残っているものだと思っていたのですが、長い時間の中で当て字や、縁起のいい字に変えられていたりもすると。謂れにも諸説ある。だから真実は分からない部分もあるけど、それを信じ伝えようと思った、それぞれの時代に生きた人々の生活や置かれた状況を考える事が面白いという話をしてくださいました。初めは、歴史を知ることが制作のきっかけになるんじゃないかなと思ったけど、その話を聞いて、かつてここに住んでいた人達の感情や心の機微を知りたいと思うようになりました。史料館でお借りした本を読んでいたら、そこに古い和歌が載っていて、それは今ではもう見ることの出来ない景色を詠んだものでした。もちろん写真のある時代じゃないから本当の姿はわからないけど、その風景を見た時の作者の感動が伝わってくるものでした。それに興味を持って、自分も言葉の作品を作ってみたいなと思ったし、言葉の表現をしている人と話をしてみたいなと思って。その時に野口さんのことが浮かびました。以前から野口さんの活動は拝見していたのですが、ある展覧会のアーティストトークを観に来てくれた時に、するどい質問を投げかけてくれて、面白い人だなと思って。聞くと、同い年、誕生日も近い、血液型も一緒、占いの結果もほとんど一緒（笑）、という人だった。

**野口卓海さん（以下　野口）**　小出さんとはずっと面識はあったけど、こういう風に話すのは初めてですね。僕もまさに展覧会を観たりとか作品を拝見したりしながら、小出さんも関西で活動されてるのでいつかこういう機会があればいいなと思っていたので嬉しかったです。言葉と美術の関係ってなかなか難しいところがいくつもあると思うんですけど、今日はあまり専門的な話は抜きにして、言葉と美術がどういう風な思案性を持っているかとか、お互いが言葉を扱う時どこに注意を払うかみたいな話をすれば今回の展覧会自体もまた違って見えてくるのではないかと思います。作品の中に言葉が扱われているので、それは結構驚いたというか…。初めてですよね？

**小出**　作品として出すのは初めてです。

**野口**　それはなぜ扱おうと？

**小出**　普段、作品の中で言葉を扱うのは、タイトルと作品に関する短い文章です。解説をしすぎて、言葉が作品よりも先行することは避けたいので、作品の後ろを行くような言葉を使うようにしています。それを一度単独で作品にしてみたかった。あと、この会場には長い廊下があるのですが、そこを歩いている間に作品から意識が途切れてしまうのが気になっていました。そこに何か次の作品へと繋ぐ為の仕掛けがあるといいなと思って、８つの文章を壁に貼ることにしました。１つの文章として読んだ時と、２つ、３つ連続で、あるいは順番を変えて読んだ時とでは印象が少し変わるように意識して作っています。文章を読み各展示室の作品を見ていく事が、それぞれで存在している作品をさらに大きな１つの作品としての表情を見せてくれるのではないかと考えました。文章は尼崎のいろんな所に行った時に、見たものの様子、思ったことを書き留めた言葉を組み合わせました。

**野口**　今その話をお伺いして、パッと浮かんだのは宮沢賢治が自分の詩のことを「心象スケッチ」という言葉で表していることです。今まで小出さんの作品って全部繋がってるような区切りがないような状況をずっと作ってたと思うんですけど、そのときなにか繋がってるような印象で糸を張り巡らしたりされてたじゃないですか。それも「text」と「textile」は語源がもともと一緒で「texere」ってラテン語があるんですけど、それをちょっと思い出したというか、ああいう風にして言葉を使うっていうのはすごく自然な無理のない感じですごく好印象でした。現代美術で言葉を使うときにやっぱりどうしても気になる部分とかがでてきたりするんですよね。作家が言葉を扱うときの振る舞いはどうあるべきかみたいな。かなりシビアに求められるので、小出さんみたいな言葉の使い方も作品として成立するんだなと思いました。今回難しかったでしょ？

**小出**　難しかったですね。言葉を使った作品をつくるというのは、どの作品よりも先に決めたんですが、形になったのは最後の方です。この作品だけでなく、全部に言えることだけど、現地制作の時の地域との関わり方っていろいろあるな思って

て。表面をなでるくらいで関わっていくのか、手を突っ込んでえぐり出すのか。通えば、通うだけその場所の事を知ることはできるんだけど、それがいいとも言えない。印象が変わっていくから。尼崎は、いつでも来ようと思えば来れちゃう距離だから、微妙な距離感の中で、自分がどういう態度でいるべきかすごく悩んでしまって、ずっと粘土をこねこねしながら思案しているような状態でやってました。

**野口**　その場所に対してどういうアプローチをするかみたいなことは、ずっと小出さんがやってきはったからその方法論が今回に活かされてるなと。話す言葉もそうですけど、小出さんの作品って石を置くみたいな行為やと思ってて。先ほど地名の話をされたじゃないですか。それもまさに石を置いてその場所が全く違った様子を呈するみたいな。その石があることで見え方が変わるみたいな。小出さんの作品も一番奥の和室が特にそういう構造になっていると思うんですけど、持ってきたものをそっと置いてあの空間が持っている意味とか場所性みたいなのが変わるけど、でもやっぱり石を置くだけやから外からの音の影響もあるし。音と作品が混じってまた全然違う見え方をしたりとか、その場所にどういう風に影響を与えるかみたいなことをまず重ねてるのかなと。

**小出**　さっき、野口さんの話を聞いて、自分の制作方法と似てるなと思いました。「みんなが言葉のプロだから言葉はどこにでも落ちてるし、僕はそれを拾ってるだけなんです。」っていうスタンス。展覧会をキュレーションすることにあたっても、野口さんはいろんな作家、作品の持ってる要素をそっと拾ってきて現場での化学反応というかそういう可能性を含んだ「余白」をすごく大事にしているのかなと思ってます。私も、自分が見たことのある現象とか、景色、記憶とか既にあるものを集めてきて、それらが反響し合うことで場が成立するっていう作り方をしているから、似ているところがあるんじゃないかと思っています。

## 言葉の使い方を変える

**野口**　キュレーションをする時にキーワードみたいなものを先に強い言葉で作って、それに合致する作家を集めてくるっていう方法が一般的なテクニックだと思うんですけど、僕はそれが果たして現代美術にとって効果的な時代がまだ続いているのかということに対して、暴力的な行動になってしまうと思うんですよね。キュレーターの保身的な振る舞いで作家が集められてしまう。自分もその片棒を担ぎ続けているんですけど出来る限りそういうことを意識しながらキュレーションはしたいなと思っていて。まぁ拾ってくるっていうのが近いかもしれないです。ずっと地図をつくりたいなと思っていて。少し専門的な話になると現代美術って文脈、歴史を作っていく行為を外部の批評家とかキュレーター、あるいは美術館みたいな組織が担ってきたじゃないですか。それって一方方向性がすごくて、烙印を押し続けているという感じなんですね、その時代や作家とか地域に対してとか。それがずっと効果的な時代は続かないと思っていて、地図って自分がどこにいるかによって変わるじゃないですか。でも同じものを見ながらその地図の重要度って完全に個人で違うし、その日によって変わるし。美術の状況もずっとそうだと思うんですよね。視点はいっぱいあるし、中心がないというか。哲学の世界では脱中心化とかずっとそういう言葉があるけど、実際それが適応されている場面が少ないのをどうやって回避していくかっていうことはずっと考えていますね。それはでも詩人とはまったく違う仕事の方法ですけど小出さんみたいにそういう風に言ってもらうと確かにちょっとどこか近いようなことがあったのかなと思いました。

**小出**　詩を書くときに用いる言葉と、美術批評とかキュレーションをするときの言葉の使い方で、気にしてることとかありますか？

**野口**　作家に対してテキストを書くときは責任を負わないといけないので、専門的な言葉になってしまうんですよね。どうしても難しく書いてしまいます。なんとなくいいよねって本当は言いたいですけど（笑）。詩は彫刻だと思ってて、どこまで削げるかっていうか。詩とは何かみたいな話、全然できないので。言葉を尽くすことは簡単やし、それを際限なくしてしまうと詩が濁るというか、言葉は詩にとって不純なものやと思っているので。言葉を使うと克明にそのシーンを描写できると思うんですけど、書きたかった印象から遠ざかってしまうみたいなことは感じますね。ただ美術に対して書くときはやっぱり説明的になりますね。それを今後どう乗り越えていくかっていうのは自分の中での課題なんですけど。実は詩人を名乗り始めてまだ３年くらいなんです。詩は 14 歳くらいからで、それを発表したのが 2014 年で、それ以降詩人らしさみたいなものをキュレーションの仕事にも出していこうかなと。

**小出**　詩人と名乗り出すきっかけみたいなのはあったんですか？

**野口**　僕が所属しているデザイナーとイベントのオーガナイザーとコーヒーの焙煎人がいるチームの展覧会を京都でしたときに最初は何も発表しないつもりだったんですけど、友人たちが詩集出してくださいよと。発表したとき、購入してくださる方がいてくださったので、「ああ詩人なのか…。」と思いました（笑）

**小出**　じゃあそれまではどこにも発表してなかったんですね。自分の為に書くみたいな。詩人と名乗り出してから書いている詩とそれまでに書いてた詩ってやっぱり違う？

**野口**　難しい質問ですね（笑）。一緒ですね。初めて出した詩集が「１行のための習作」なんですけど、100 ページあって１枚１枚がバラバラなんですよ。１冊１冊の順番もバラバラで、詩集を作ろうと思ったときに編集作業によって詩の印象がガラっと変わったりとか前後関係が生まれてしまうとか自分の中ではちょっと違うなと。詩って最終的に１行でいいと思っていて、フォントが明朝体じゃなくてもゴシック体でもポップ体でもあるいは大きさがバラバラでも成り立つような一行があるのではないかと思って、そういう構造にしたんです。だから１枚１枚でも成り立つようなものがあったりとか。

**小出**　私が表現という行為の中で、美術以外に影響を受けているものの中に「詩」があって、それこそ詩集もよく読むんですけど、今日は野口さんからの提案で、好きな本をいくつか持ってきたんです。その中で最近いろんな人に薦めているのが、寺田寅彦さんの本です。物理学者でありながら、随筆や俳句もたくさん残している人です。観察眼と言葉の扱い方が面白くて、例えば「線香花火」という随筆では、火をつけてから火球が落ちるまでの数分のことが書いてあるんだけど、壮大な小説のような読後感。たったひとつの小さな現象に対

野口卓海さん

して、これだけ言葉が出てくるんだってことに驚きを持って読みました。ぜひ読んでください。あと谷川俊太郎さんも大好き。

**野口**　本当に詩人として生業が成立しているのが谷川俊太郎以外いないのでその点がまさにすごいですよね。詩は戦前の現代詩とか読むけどあんまり精読しないようにしてて。中原中也が一番影響を受けたので、中原中也くらいの世代の詩は結構暗唱できるくらいに読みました。けど、谷川さんとかそれをやっちゃうと怖いので、できる限り距離をとってますね。現代美術作家、特に若手の作家がステートメントを書くときに訳のわからない言葉を使うじゃないですか。詩に似た言葉のようなもの。あれはやめたほうが良いというか、すごく難しい問題やと思っていて、なんで日本の若手の作家がああいう風になりがちなのかぜんぜんわからないんですけど。李禹煥さんとかは理論をかける上に、柔らかい言葉をかけるっていうところが魅力だと思いますね。ときどき美術作家の人でいるんですよね、言葉が面白い人。写真家の志賀理江子さんとか。打ち合わせのとき話しましたけど写真やってる人って言葉うまいよねって話を小出さんとしたことがあって。さっき言ってた詩情みたいなものが世界には充満していて、僕はそれを言葉で持ってくるんですけど、それを写真家はフィルムで感光させて持ってくる。友人の写真家が言っていたのはむっちゃ写真的な風景が広がってさ、みたいなことを言うんですけど撮ってないんですよ、撮らなくていいみたいな。説明してくれるんですけど、もう撮らなくてもいいと思うらしいんですよ。ためらうらしいんです。それを克服する作業も彼の作家性にとって多分重要なのだろうけど、その話を聞いたときにわかる！　って思ったんですよね。同じ感性だなって。

小出麻代さん

**小出**　私は写真のプロじゃないけれど、すごいものを見たときに、パシャっとできない時があります。これは、頭に残すしかないなって。あの瞬間ってなんでしょうね。そして写真家はその瞬間をどうやって克服するんだろうって。

**野口**　彼が言うには決定的瞬間から遠ざかりたいと言っているんです。例えばすごく高い山に登って撮った写真とかって行けば撮れるし、運の介入するものは自分が撮る写真ではないという話をしていて、それはよく分かるなと思います。

**小出**　時間も残り少なくなりましたね。

**松長**　お二人にご質問などございませんでしょうか？

**来場者**　今日小出さんの作品を初めて拝見したのですが、今回展示をする前に尼崎のことをいろいろ調べたという風に伺って、自分で調べて作品を作って、という段階の中で、そのときに最初にリサーチして思った印象と、展示が完成した後に自分が客観的に見た印象って変わったりしましたか？
なぜそういう質問をするかというと、本当に初めてなので、どこからどこまでが小出さんの普段の状態で、どこからどこまでが尼崎が介入した部分なのかっていう線引きが今ふわふわしていて、それがもし小出さん自身の中でも変化があるのであればお伺いしたいです。

**小出**　今の状態でいうと、作品が完成したというところで自分も止まっているので、まだ冷静に考えるところまでいけてないというのが正直なところです。今後、ゆっくり咀嚼していくんだろうと思います。尼崎から受けた印象の話をすると、私が住んでいる所から近いのに、一度も来たことがなかったんです。だから、昨年度参加したグループ展のトークでも話したのですが、ステレオタイプなイメージしか持っていませんでした。だけど、実際この街に来て、抽象的な言い方だけど、「動き続けている」っていう印象を受けました。人が生きているって言う意味もあれば、たくさんの工場でいろんなものが生み出されているとか。私が住んでいる街はまたちょっと雰囲気が違う。私の街は、ベッドタウンっていうのかな、人が休む場所みたいな感じ。もちろんそこにも生活はあるんだけど、動きがゆるやか。この街は跳ねるような動きというイメージ。

　どこからどこまでが私の普段の状態かというのは、難しい質問ですね。例えばこれまでで、一番影響を受けた場所は、新潟の山中の何軒かしか家がない集落です。夜は体験したことのない暗闇がある場所で、初めは普通の生活をする事にさえ色々と驚きがありました。自然のすごさとか、その中で生きる人の強さとかに触れて、精神的にもだいぶ影響を受けたし、作品にも影響していたと思います。今になって新潟の前と後では、と考えることができるけど、その時は生活も含めて、それが全てだったから。だから、今回もしばらく時間が経って、振り返った時に尼崎以前以後が、出てくるかもしれません。

**野口**　今回の作品のタイトルが「うごきつづける」「うまれくるもの」「こえをみつめる」「よあけまで」なんですけど、何かから何かに動いている状態だったりとか現在進行形の言葉がすごく多くて、作品の中に使っている言葉にも呼吸するみたいなイメージを感じました。例えば伸縮するとか人が入ったり、出たりとか。呼吸というワードが作品の各所で出ているのではないかと思うのですが。

**小出**　言葉の作品の中の「空気を揺らしながら 息をしている」の話をすると、息をしているのは自分なんだけど、同時に空気も振動している。一人でここに立ってるわけじゃなくて、いろんなものが絡み合う中で生きている。自分のふるまいが連鎖しているというイメージを言葉にすると「呼吸」というのがしっくりくる。

**野口**　実際地図を作品の一部に使ったりとか、そういう触れ合い方をすると地名の意味が変わったり、好きな地名が出てくるじゃないですか、ハッとするみたいな。

**小出**　けま！

**野口**　けま？　どういう字ですか？

**小出**　食べるに、満たすで「食満」って読むの。食べることで満たされるから「食満」。で、形が胃腸みたいなの！　ほんとに！　衝撃的！